

# 『万葉集』から見る日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

## 有間皇子 その2

先回は『万葉集』巻二の挽歌冒頭部に載る有間皇子の歌を取り上げるために、作品の背景となる有間皇子事件を追った。今回はいよいよ有間皇子の歌を含む作品群をみることにしたい。まずは次に歌を掲げる。

### 挽歌

後岡本宮に  
天の下治めたまひし  
天皇の代

「天豊財重日足姫天皇、讓位の後、後岡本宮に即きたまふ」

有間皇子自ら傷みて松が枝を結ぶ歌  
二首

岩代の

浜松が枝を  
引き結び  
ま幸くあらば  
またかへり見む  
(巻二・一四二番歌)

家にあれば  
筈に盛る飯を  
草枕  
旅にしあれば  
椎の葉に盛る  
(巻二・一四二番歌)

長忌寸奥麻呂、結  
び松を見て哀咽す  
の歌二首

岩代の  
崖の松が枝  
結びむ  
人はかへりて  
また見けむかも  
(巻二・一四三番歌)

岩代の  
野中に立てる

結び松  
心も解けず  
古思ほゆ「未詳」  
(巻二・一四四番歌)

山上臣憶良の追和  
する歌一首

翼なす

あり通ひつ  
見らぬども  
人こそ知らね  
松は知るらむ

右の件の歌どもは  
松を挽く時に作  
る所にあらずとい  
へども、歌の意を  
准擬す。故以に  
挽歌の類に載せ  
たり。  
(巻二・一四五番歌)

大宝元年辛丑、紀  
伊国に幸せる時に  
結び松を見る歌一  
首「柿本朝臣人麻  
呂が歌集の中に出  
でたり」

後見むと  
君が結べる

岩代の  
小松が末を  
また見けむかも  
(巻二・一四六番歌)

歌群の冒頭にある「挽歌」は、広く死を悲しむことを意味する万葉集の歌の分類の一つである。「後岡本宮に天の下治めたまひし天皇」は第三十七代齊明天皇を指す。「天豊財重日足姫」は、齊明天皇の和風諡号であり、「後岡本宮」は齊明天皇の皇居をいう。

「有間皇子自ら傷みて松が枝を結ぶ歌」と題詞にある有間皇子の歌とされるのが一四二、一四三番歌の二作品である。「自傷」は辞世の悲しみについていう言葉である。従って、当該の二首は、先回触れた有間皇子事件で謀反の罪で捕えられた有間皇子が、自らの運命を悟り、紀温湯へと



有間皇子結松記念碑(和歌山県日高郡みなべ町)

味が変わってくるが、ここは意志とじて、「再び帰ってきてみよう」の意と考えられる。

二首目の二句目「筈」は「飯」を盛る器の事である。歌は、「現在は旅の途次であるので、これを「椎の葉」に盛った」という意味だが、なぜ小さな「椎の葉」であるのかという点で諸説が別れていて、道中の神に捧げる神饌であるとの意見もある。ここは、旅先の不如意を詠う表現ととらえておきたい。有間皇子の歌は当該の二首だけであるが、歌群はさらに長奥麻呂や山上憶良、柿本朝臣人麻呂の歌を伝える。三首目、四首目は長奥麻呂の歌である。歌群中の配列から「岸の松が枝」を結んだ「人」は有間皇子を想定しており、四首目の「古」は有間皇子の当時を回想してのこととある。「松が枝を結んだ人は、再びこの松を見たのだろうか」といって「結び松の結び目のよう

に、心も晴れず、昔のことが思われる」と詠う。

そして、五首目の山上憶良の歌は「追和」とあることから、奥麻呂の歌に、後になって唱和した歌だということがわかる。初句の「翼なす」は原文「鳥翔成」で、万葉集中の難訓の一つとされる。当該の訓みは『万葉考』(江戸時代の万葉集の注釈書)にならって「三句目「見らぬども」の主語は有間皇子とされ、皇子の魂が鳥のように空を飛び翔つていくことを想像しての上の句である。そのことを「人」は知らないが、「松」は知っているのである。ところで、当該歌は左注に「松を挽く時に作る歌ではない」とある。つまり、有間皇子事件から時間が経過していることを指摘していることである。しかし、「歌の意を准擬す」とは、まさに「挽歌」の心になぞらえて一首が詠われていることを示唆している。

六首目は題詞に「大宝元年(七〇一)とあることから、有間皇子事件から四十三年も経ったときの歌であるということがわかる。二句目の「君」は有間皇子を指し、「小松が末」は「結び松」の事を指す。歌は「後に見ようと思つて結んでおいた小松の梢をまた見たであろうか」の意である。

さて、四十三年後の歌とともに歌群を構成する有間皇子挽歌群は、少なくとも、有間皇子事件の直後にまとめられたものではない。数十年の時を経て、「岩代」を訪れる人々が皇子のことを回想して詠み継いだ歌が取められていると考えるのが穏当であろう。「岩代」といって、「結び松」といい、その一言を聞くだけで、皇子の事件が想起され、語られていたことをこの歌群は物語っていると言つてよい。まさに歌群の中で「伝承」の世界が展開されているのである。

### 北山たけしデビュー十五周年記念曲

## 『津軽おとこ節』を熱唱

四月二十二日、八王子市内のイーアス高尾及び、日の出町のイオンモール日の出において、演歌歌手の北山たけしさんが、デビュー十五周年記念曲の『津軽おとこ節』の新曲キャンペーンを行われた。

北山さんは平成十六年に「片道切符」でデビューされ、数々の新人賞を受賞、高尾山にはヒット祈願や節分会の豆まき等で何度も来山されている。

デビュー十五年目を迎えた本年、新たな気持ちで新曲のヒットを願いキャンペーンが続けられている。

今回の新曲は、師匠である北島三郎(ペンネーム・原譲二)さんが作詞作曲され、東北を舞台とした力強い人生の応援歌である。

新曲の大ヒットと、これからの益々のご活躍をお祈り致します。



『津軽おとこ節』を唄う北山たけしさん